

# 青い山脈

映画文学人生論

原作：石坂洋次郎 (1947) 「朝日新聞」

監督：今井正 (1949)

出演：島崎雪子 原節子  
金谷六助 池部良  
寺沢新子 杉葉子  
沼田玉雄 竜崎一郎

脚本：今井正 井出俊郎

撮影：中井朝一

音楽：服部良一

笹井和子 若山セツ子  
梅太郎 木暮美千代

しかしぼくは民主主義を尊重する

石坂洋次郎の『青い山脈』は私が高校を卒業した年に読んで、面白いと思った。

その感想を素直に口走ったら、同じ下宿の学生から「あれは文学じゃないよ」と笑われた。口惜しいけれども、反論できなかった。

なぜ『青い山脈』は文学ではないのかという積年の宿題を考えるため、あらためて今井正監督、原節子主演の映画を観た上で、原作を読み直してみた。やはり面白い。

明るい青春文学、そして勧善懲悪小説だ。善玉と悪玉がはつきしている。善玉は新しい価値観の民主主義者、悪玉は古い価値観の封建主義者、最後は善玉が勝ち、めでたし、めでたし。

まことにすつきりして、後味がよいが、勧善懲悪を否定する坪内逍遙の『小説神髓』によれば問題があるかもしれない。

「小説の首脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」と逍遙は説く。『青い山脈』は、日本人の価値観がひっくりかえった終戦直後の東北の田舎町における人情と世態風俗を描いている。

映画では原節子が演じる島崎雪子先生が、「あなたにはバカです」といって、同僚の沼田玉雄（竜崎一郎）の頬をなぐる。公衆の面前で女の先生が男の先生をなぐるというのは男尊女卑の古い価値観が支配する戦前では共感をよばないはずだが、男女平等、民主主義のもとでは新しい価値観の表現



# 青い山脈

映画文学人生論

として観客に受け入れられた。

ただし、民主主義が単純に善とみなされているだけで、意味が理解されているとはいえない。

「どうして昔はわるいことに考えられ、いまはいいことに考えられているのですか？」と島崎先生が生徒に聞くと、「今は民主主義だからです」という答えがかえってくる。ことばの上だけの民主主義だ。

「しかしぼくは民主主義を支持するよ」という大学生の富永安吉は少しはわかっているようにみせかけているが、PTAの会議に出席して、突然発言をもとめ、「ゲートいわく、新しき真理に対して最も有害なるものは、古き誤りである」、あるいは「セネカいわく、思慮深きものはたやすく怒らず」というだけだ。

古い上着よ さようなら

さみしい夢よ さようなら

要するに、古いものは封建主義として捨て、新しいものは民主主義として受け入れて、未来に希望を託したいという庶民の単純な感情にうったえている。すっきりとしてわかりやすいが、現実には古いものは悪、新しいものは善と単純に割切ることにはできない。それはリアリズムではない。

衣更古い上着よさうなら